

伝統工芸の体験から、生き方を考える

地域に根ざした伝統や文化を学ぶ学習では、息の長い活動が必要です。ここでは、門出和紙を取り上げ、和紙の原料となる楮の栽培から紙漉きまでの一連の工程を体験します。継続的な体験の中では、伝統工芸に携わる方とのふれ合いが繰り返されます。一連の工程をやり遂げたからこそ生まれる達成感や気付きは、仕事に携わる人の工夫や願いへの深い共感を生みます。こうした子供たちの体験から生まれる実感をもとに地域への誇りや自己の生き方を考える力を育成していくことが大切です。

1 地域に根ざす伝統工芸を体験する価値

地域の自然とともに生きた伝統工芸の素晴らしさを深く学ぶことは、その地に生まれ育つ子供でないとできない貴重なものです。

高柳小学校は黒姫山の麓、山紫水明の山里に位置します。過疎化の進行が顕著ですが、地域には継承すべき日本の文化が数多く残されています。

「門出和紙」は、豊かな森林の中で楮（コウゾ）の木を育て生産してきた自然の恵みと職人の技が織りなす、自然と人の調和の産物です。

高柳町内の門出地区にわずかに一軒残る紙漉きの工房の協力を得て、世界遺産となった和紙づくりの業を楮の栽培から和紙の繊維を取り出す工程まで、一連の工程を体験させます。そうすることで、自然の恵みや物づくりの工夫や努力、更に、その仕事に携わる人の思い等を五感を通じて学ぶことができます。このような体験を通じて、ふるさとへの誇りと愛着を育て、自己の生き方を考えていきます。

2 指導の構想

(1) 指導の全体構想

① 楮の栽培から和紙を漉くまでの一連の工程を体験する

- ・楮の栽培
- ・刈り取り
- ・楮蒸し
- ・皮むき
- ・皮引き
- ・ちりより
- ・たたき
- ・紙漉き

② 和紙づくりへの思いを知る

- ・自然への見方・考え方
- ・一つ一つの工程
- ・和紙への思い
- ・人とのつながり
- ・仕事への思い
- ・人への優しさ
- ・地域への思い
- ・新しい事への挑戦

③ 体験による達成感や気付きを自己の生き方に生かす

- ・世界に一つだけの卒業証書
- ・できた和紙をつかって町の祭りを盛り上げる
- ・和紙をつかった行灯作り
- ・自分の生き方に生かす

(2) 指導の方策

① 楮の栽培から和紙を漉くまでの一連の工程を体験する。

・和紙の体験の多くは、紙漉きの工程のみです。ここでは、原料となる楮の栽培から繊維を取り出すまでのほぼ全行程を体験させます。

② 和紙づくりへの思いを知る。

・和紙工房の職人さんから、四季を通じた楮の栽培から紙漉きまでを指導をしていただきます。繰り返しふれあい事を通して、和紙への思いなどの気付きが生まれます。

③ 体験による達成感や気付きを自己の生き方に生かす。

・できた和紙、体験を通して自分たちでできることを考えます。活動を振り返りながら、体験で生まれた気付きを自己の生き方に生かそうとしていきます。

2 実践の実際

(1) 楮の栽培から紙すきまでの全工程を体験する

楮を新芽から世話し、炎天下の草取り、鎌を手にした刈取り、楮の枝を釜で蒸す作業、皮をむき、皮と幹の間にある繊維をへらでそぎ取る皮引き作業等、楮の栽培から、紙漉きまでの和紙づくりの全工程を体験します。

5・6年生複式学級の児童が、総合的な学習の時間で体験しました。体験は、和紙工房の主宰である小林さんに親子で指導していただき、最終的には手漉きの卒業証書製作を行います。複式学級を生かして、6年生は今年が2回目の体験となります。紙漉きの一連の工程を学ぶ中で、物づくりの大変さと大切さを実感を伴って学ぶことができました。

楮の栽培	楮は、桑科の落葉低木で雪解けの4月末頃に、株より新芽をだし降雪前の12月初旬までに3~4mに成長する。5月頃から、雑草の刈り払いや、わき芽取りを3~4回繰り返す。
刈り取り	11月中旬、落葉を待って刈り取る。長さを揃えて切り束にする(玉切り)
楮蒸し	原木を1mほどに切り、大釜で約90分蒸す。
皮むき	蒸し上がった楮の皮を、1時間以内でむく。乾いてしまうと皮は再び木にくっついてしまう。
皮引き	楮の黒皮を水に浸して表皮を削り取る。包丁等の背を下に皮を押し抑えつけて、皮の方を引きながら表皮を削る(芽落とし)。更に深く削り取った(なぜ皮)、緑色部分をすべて剥ぎ取った(白皮)と仕上がりが異なる。
ちりより	水の中で1本1本、楮皮の表裏、丹念にキズやちりを取り除く。
たたき	大叩きをして水を絞った原料を、堅木の上に広げて大きな木刀等で左右にゆっくり強く叩く。 その後小叩きとして水を加えながら小さな木刀で早いリズムで軽く叩く。

【子供たちの感想】

A 児：楮の成長力がすごい。自然は大切だと言うことが分かった。植物を育てたことはあったけれど、楮の木を育てることは初めてだったのでおもしろいなと思った。脇芽取りや草刈りなど、大切に育てればよい楮に育つ。これは、人に対しても同じ。これからも友達や家族をもっと大切にしていきたい。

B 児：1年目は作業の大切さがよく分からなかったけれど、2年目には作業の大切さがよく分かった。去年育ててきたので、去年より、もっといい楮を育てよう自分から「がんばろう！」という気持ちがわいてきた。

5年生の A 児は、今年初めて楮を育てました。作業は大変であったけれど、その中に楮の木の成長力を感じています。楮の世話で感じたことは、人に対しても同じ事であるということに気付きました。

6年生の B 児は、連続した体験の中から、一つ一つの工程の意味を理解し、

もっとよい楮を育てようとする意欲が生まれました。

息の長い体験をすることで、自然の力や恵みの実感、対象に対する愛情や情熱等の気付きが生まれています。更に前学年との継続により、活動の意味を実感しながら見通しをもって取り組む姿が見られました。

(2) 地域や自然を愛する心に触れる

高柳町門出地区に、地域で唯一となった紙漉きの工房「高志の生紙工房」があります。代表の小林康生氏は、自然と人との共存、調和を重視し、工房にはイスラエルをはじめとして多くの外国人が訪れ、技能のみでなく小林氏の思いに触れています。2017年には、隈研吾氏の依頼で外務省の仕事を受け、ブラジルの日本広報拠点の「ジャパンハウス」の内装を依頼される等、広く活躍されています。和紙づくりの関わりの中で、小林さんの自然に対する考えや新しいことに挑戦する態度に触れさせたいと考え、和紙や地域への思いを聞く機会を設定しました。



紙漉きの仕事をするようになって、我が家では私が五代目になります。昔は、この門出で40戸程が冬の副業で紙を漉いていたそうです。ところが、1973年、私が紙を志した時には我が家1戸のみでありました。

私は小国町山野田の恩師、木我忠治氏より用具や教えを頂き、その後私は、大判の紙に取り組み、父は工芸紙に取り組みました。父と私は自然の摂理に従った中でそれを現代にどう生かすか試行錯誤の連続でした。

その後、私は地域おこし運動に傾注することとなり、我がふるさとの名前を生かして、1986年、「越後門出和紙」と命名しました。

和紙は生きています。それで、私は生紙と言っています。他人から見れば、和紙はただの物かもしれません。でも、和紙は生きています。そして、私の子だと思っています。だから、和紙のなりたいたいにさせてあげたい、という気持ちで和紙づくりをしています。

人間も、自然に生まれた自然の子です。だから、自然に逆らってはいけないと思うのです。気温や湿度に応じて和紙を乾燥させる温度や時間を調節してやる。和紙と付き合っていると、どのような紙になりたがっているかを感じるようになりました。紙がなりたいたいに仕上げてやるのが今の私の仕事だと思います。

C 児：楮を育てるのは大変だけど、それをずっと続けていることがすごい。康生さんはいろいろなことに挑戦して、失敗してもくじけないことがすごい。僕は、物に愛情をもって何事にも挑戦できる人になりたいです。

D 児：私たちの身の回りにあるものは、すべて作ってくれた人などが苦勞して作ったのであるから感謝したいです。高柳のために貢献できる人に僕もなりたい。

E 児：和紙は完成しても生きています。康生さんが言っていた「自然は何一つ教えてくれない。でも、五感で感じることで自然はたくさんのことを教えてくれる。」という言葉が心に残る。

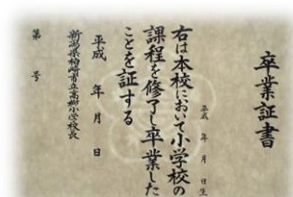
子供たちは、C児のように、小林さんが伝統を生かしながら、世界に向けて活躍する姿に「愛情」をもち「挑戦」することの素晴らしさを感じている。D児は、小林さんの話を体験と結び付け、自分たちの身の回りのものがすべて人とのつながりでできていることに気付いた。E児は、小林さんの言葉から、自然に対する考え方を深める姿が見られた。このようにして、小林さんの姿から子供たちは、「地元に貢献できる人になりたい」「これから、もっと地域のことを自分から好きになりたい」という気持ちをもつことができた。

(3) 世界に一つだけの卒業証書の製作

春から始まった、楮の栽培、楮の刈り取りから和紙となる繊維を取り出す工程を

経て、年が明けて紙漉きを行ないました。

製作する卒業証書は、校章の「すかし」を入れた三層の和紙で出来た証書となります。子どもたちは、正に一期一会の思いで緊張した面持ちで紙漉きと向き合いました。



「すかし」の入った証書

春夏秋冬を通じた息の長い学習を設定し、自らが育て渡した世界で1枚の卒業証書を卒業式に受け取るというゴールの姿を明確にすることで、子供たちが高い活動意欲を保ちながら活動することが出来ました。

できあがった卒業証書を手にした子供たちは、「和紙は作るのではなく育てるもの」「楮から紙になった時の感動がある」「楮から育てているからとても大切にできる」などの感想を口にしながら、できあがった証書を見つめていました。

F児は、「卒業証書を手にした瞬間、一つ一つ心を込めた細かい作業がつながり、一生の宝物ができた。」G児は「小林さんをはじめ、工房の人たちの和紙に対する熱意や仕事に対する誇りを感じた。」と述べています。多くの子供たちが、「和紙は自然と人が関わってできるもの。自分ももっと高柳の自然や人と関わっていきたい。」という気持ちを抱きました。

4 まとめ ～体験による達成感や気づきを自己の生き方に生かす～

1年間を通じて栽培から紙漉きまで取り組んできた児童たちは、小林さんをはじめ地域の人への感謝の気持ちを高めました。5・6年生は、和紙が完成すると、この経験を生かして、町の役に立ちたいと考えました。

和紙づくりの指導に当たってきた職人さんとも相談しながら、楮の枝と、和紙を使った行灯を製作すること、更に2月の高柳「雪祭り YOU 悠 遊」に陳列し、祭りを彩りたいという考えにまとまりました。

「門出和紙」の活動では、1年を通じた活動の中から、ふるさと高柳の自然の恵みや人々の暖かさを感じ取り、改めてふるさとへの愛着を増していくことにつながりました。

紙漉き体験のみであれば他校でも行われるでしょうが、古くから豊かな自然の中で楮の木を育て、和紙を生産してきた地元だからこそ、これら一連の活動に取り組むことが可能となりました。

息の長い体験の中で繰り返して触れあう地域の人からは、自然の見方への深まり、物事に対する愛情や挑戦する心など自己の生き方につなげて捉える姿が見られました。このように門出和紙の実践からは、地域を知り愛着をもつ、地域の人とふれ合いふるさとに誇りを育むことことにつながりました。

それぞれの地域には、地域を支えてきた文化や産業があります。その一連の行程を子供たちが自ら体験する息の長い実践を構想することで、ふるさとへの愛着と誇りや社会に向き合い自己の生き方を考える力が高めることができます。

【高柳小学校 牧 匡尚】